

でいくつかの研究が世に問われていて、その實際がかなり明らかにされている。しかし後者の科目については、今日までそれを専論した考察がきわめて少ないために、その内容についてはほとんど不明のままの状態にあるように思われる。

この報告はその後者の制度を明らかにするために、主として察舉による敎官の問題を取上げて、ある被察舉者が賢良方正などに指名されて新しい官職に任命されるばあい、そこにどのような昇進の基準が設けられていたか、という運営の實態について考えることにする。そしてその昇進の基準が當時の官僚制度全體といかに關連するかということを摸索することによって、そこに露呈されるはずの二三の問題點について、多少の検討を試みることにしたい。

チャハルのブルニ親王の亂をめぐって

森川 哲雄

モンゴル史における一七世紀は、まさしく激動の時代と言えよう。チャハルのリグダン・ハーンの敗死と内モンゴルの清朝（後金國）への併合、ジュンガル王國からの壓迫を契機とする外モンゴルの、清朝への降付は、それを象徴するものである。こうした中で、モンゴリアには様々な問題が生じた。その一つがチャハル王家に關する動向である。周知のように清朝政府は、チャハル王家に對し、他の諸公とは異なつた待遇を與えていた。しかしチャハル王家はチンギス・ハーンの嫡系であるということで、必ずしも清朝に信服はし

ておらず、また清朝政府にとつてもその處遇には十分な注意が必要であつた。しかし吳三桂の反亂を契機に、當時のチャハル王家の長たるブルニ親王が亂を起こすと、清朝はこれを直ちに鎮壓、さらにはチャハル王家を斷絶させたのである。このブルニ親王の亂については史料も少なく、また十分な研究もなされていない。そこでブルニが亂を起こした原因、その失敗の理由、またこの亂をモンゴル人たちがどのようにみていたか等について検討してみたい。

マムルーク朝時代のクルス・アイザーブ道 ——特に al-Tujibi の巡禮記に依る——

家島 彦一

ムスリム社會におけるメッカ巡禮は、單にその宗教的義務を遂行する目的だけに留らず商人・出稼人・職人・學者知識人・移住亡命者達たちが往來し、國家や地域社會の枠を越えて、イスラム世界全體のなかで人・物・情報などが交流し融合し合う重要な役割を果たしてきた。マグリブ地方のムスリム社會にとつて、メッカ巡禮は、言わば邊境のアトラス山間部から出て、廣く東方イスラム世界の學術・文化と社會にふれる好機であつて、とくに十一世紀後半以降の激しく變容する社會情況のなかで、マグリブ巡禮者たちの數は激増した。また、彼らは多くのメッカ巡禮記 (al-Hajj al-Muhammadi) を殘しており、それらの記載内容にはエジプト・シリアやイラク地方の社會・經濟情況を伝える、極めて重要な記録を含んでいる。私は、とくに十三

十八世紀におけるエジプト・シリア社會・經濟を傳える新しい史料として、マグリブ巡禮記の重要性を強調したい。本發表では、マムルーク朝スルタン al-Mansur Iqtidar 時代にアレキサンドリア、カイロ、クース、アイザープを通り、紅海を渡つてジッダからメッカ巡禮を果たしたセウタ生まれの人 al-Tunji による巡禮記 *Mustafad al-Rihla wal-I'tirab* をとりあげて、とくにクース・アイザープ道をめぐる國家・遊牧民・商人たちのかかわり方、交通運輸の具體的なあり方について考えてみたい。

アンカラ戦以後のオスマン・ティムール

兩朝關係

小山 皓 一 郎

一四〇二年のアンカラ會戦と、これに先立つオスマン・ティムール兩朝關係については、既に加藤和秀氏の論考もあり、比較的研究されているが、この戦いの戦後處理とティムール朝のアナトリア支配にはあまり関心が寄せられていない。これは一つにはオスマン朝の再起が速やかであつたため、ティムールの征服が一過性の暴風のように受けとめられたためであらう (P. Wittek など)。しかし、ティムール朝の suzerainty (Stanford Shaw) はティムール死後も存続したと見られ、これはオスマン朝の歴史において、從來考えられた以上の意味を有したのではあるまいか。

本報告においてはアンカラ戦以後のオスマン・ティムール兩朝關

係について、まず史料に見える事實を洗い直し、ついで同時代人がこの兩朝關係をいかに認識していたかを見ていきたい。史料の提供する情報は決して充分とはいえない。敗者であつたオスマン朝側の史料は、ティムール朝に對する從屬的關係について寡言であり、またティムール朝史料は僻遠のアナトリアには多く言及しない。ここで注目したいのは、第三者として兩朝關係を見守っていたビザンツの史料である。本報告ではオスマン、ティムール、ビザンツ側の諸史料を用いて、標題のテーマに關する情報整理を行ないたいと思ふ。

東部ジャワのムスリム村落における

イスラムと慣習

今 永 清 二

インドネシアのイスラム社會においては、イスラム教と土着のアニミズムとが果層化して信仰され、ムスリム村落ではさまざまな慣習 (アダット) が現實的機能をもっているといわれる。

報告者は昨年十月、東部ジャワのジョンパン縣下のカンボン・ブドゥグで、イスラム法と慣習に關するヒアリングを行い、ムスリム生活について調査を実施した。

カンボン・ブドゥグは三〇一戸からなる農村で、信仰心の厚いムスリム村落であるとの印象をうけたが、同時にさまざまな慣習が行われており、調査の主要項目であつた結婚・離婚においても、イス